

この言葉、日本では四字成語としては使われていませんね。「粉骨砕身」と言う言葉に置き換えられるでしょうか。

・>・>・>・>・>・>・

諸葛亮は、劉備を助けて成都に蜀の政権を打ち立て、自ら大臣となりました。しかし、まもなく劉備は病気で亡くなってしまいました。

劉備の死後、諸葛亮は劉備の息子・劉禪が蜀の国を治めるのを助けました。誠心誠意国の経営に当たり、蜀の国を段々に盛り上げていきました。劉備が生前望んでいた中国の統一を実現すべく、中原の支配権を手に入れようと、前後六回も軍隊を率いて戦いました。統一の大業を成し遂げるべく、彼は《後出師表》をしたためました。その中で諸葛亮は、「慎み深く献身的に尽くし、死ぬまでやめません」と決心を述べ、その言葉通り、忠誠心を持って一所懸命蜀の国のために働き、戦場でその一生を終えたのでした。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：鞠躬＝身を屈めて敬い謹む様子。瘁＝疲れ果てる。四字成語としては、あることに全身全霊で当たり、奮闘努力すること。

使い方：王先生は、教育事業に全身全霊で取り組み、一生を捧げられました。

・>・>・>・>・>・>・

諸葛亮、日本では諸葛孔明として有名ですが、中国では諸葛亮と呼ばれています。ご存知のように孔明は字、亮は本名です。

諸葛孔明は、三国志演義の中では才能豊かな英雄の一人として描かれ大活躍しますが、話には大分誇張があるようです。それでも、「三顧の礼」で劉備に迎えられ蜀の宰相となり、劉備の死後はその子・劉禪を助けて蜀のために尽くしたことは史

実です。蜀の国を経営する中で、劉禪に「出師表」を奉り、軍隊を動かしています。

「出師表」とは、臣下が出陣する時に君主に奉る文書のことですが、孔明が劉禪に差し出した「出師表」は古今の名文として名高く、単に「出師表」と言えば、孔明のものを指しているのです。そして孔明は2回にわたって「出師表」を提出したと言われ、区別するために2回目のものは「後出師表」と言われています。この本では、「後出師表」のことを取り上げています。

ところが、この「後出師表」には昔から、学者

の間で真偽の論争があります。それでもここで「後出師表」のことを言っているのは、この後孔明が戦場で亡くなっているからでしょうか。「真偽の議論は、大人になってからやりなさい」という事でしょう。

孔明は、自分を迎えて重

用してくれた劉備の信頼にこたえて、劉備亡き後もその子劉禪に誠心誠意仕えて、鞠躬尽瘁というこの言葉を実践した人で、三国志演義では理想的な人物として描かれています。確かに素晴らしい人物ですが、軍人としては、五回も出陣し北伐を試みましたが、めぼしい成果は上げられませんでした。

これに関して、《三国志（歴史書）》の選者・陳寿は、「孔明は、政治家としては優れていたが、軍人としては一流とは言い難い」と評しています。

しかし一方で、孔明の北伐は、蜀の版図を広げるためではなく、北に位置する魏の進出を阻止するのが目的で、孔明の存命中、その目的は十分に達せられたとの評価があります。

戦線の近くで屯田を実施したことが、その証拠として挙げられています。

